



Title	J.S. ミルと歴史学派
Author(s)	佐々木, 憲介; Sasaki, Kensuke
Citation	経済學研究, 60(3), 15-27
Issue Date	2010-12-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/44488
Type	departmental bulletin paper
File Information	ES_60(3)_15.pdf



J.S.ミルと歴史学派

佐々木 憲介

はじめに

経済学史上の歴史学派といえ、なによりもまずドイツ歴史学派を思い浮かべるのが普通である。しかし、ドイツ歴史学派が隆盛を誇った1870年代から20世紀初頭にかけての時期は、歴史学派の運動が国際的に広がっていった時期でもあった。そうしたなかで、ドイツに次いで歴史学派の運動が活発になったのは、古典派経済学が衰退した後のイギリスであった。すなわち、1870年代以降、イギリス歴史学派(English historical school)と称される一群の経済学者が現われ、経済学上の有力な潮流となったのである¹⁾。歴史学派は、古典派の理論的・演繹的方法に対して歴史的方法を対置し、古典派の方法論をさまざまな角度から批判した。しかし、古典派を代表する経済学者の一人であるJ.S.ミルは、古典派の方法論的立場を堅持しつつ、歴史学派の観点を先取りする議論をも展開していた。すなわち、ミルはその『論理学体系』

(初版1843年)において、すでに歴史的方法について語っていたし、それ以外にも歴史学派のものとして主張を展開していたのである²⁾。はたして、ミルの経済学方法論はイギリス歴史学派とどのような関係にあったのだろうか。この問題を考察することが本稿の課題である。

ミルが、ベンサム派・リカード派として出発しながら、その枠組みには収まらない議論を展開したということは、歴史学派に属する経済学者によっても認められていた。例えばアシュレーは、ミルが強い現実感覚をもち、偏見なしに新思想や他人の意見を取り入れる姿勢をとっていたために、自分の出発点に安住することがなかったとし、そのようなミルに大きな影響を与えたのが、コールリッジ、コント、および妻ハリエットがそれぞれ代表していたような思想潮流であったとするのである(Ashley 1909, ix)。このように、同時代の思想潮流の影響を受けながら、ベンサム派・リカード派の枠組みを越えて進んでいったミルの姿を、歴史学派はどのように見ていたのだろうか。われわれは、歴史学派を先取りしていたように思われるミルの観点を取り上げて、経済学における理論と歴史という問題がどのように展開していったのかを検討し、ミルと歴史学派との関係という問題を考察することにしたい。

1) *The New Palgrave A Dictionary of Economics* において、「イギリス歴史学派」の項目を執筆したマローニは、この学派のメンバーについて次のように述べている。「1875-1890年に全盛期を迎える経済学者のグループで、主要な人物は、John Kells Ingram(1823-1907), James E. Thorold Rogers(1822-1890), T.E. Cliffe Leslie(1827-1882), William Cunningham(1849-1919), Arnold Toynbee(1852-1883), William Ashley(1860-1927)および W. A. S. Hewins(1865-1931)である」(Maloney 1987)。ただし、イギリス歴史学派は、研究上の共通の傾向を示す緩やかな集団であり、すべての論点について共通の見解をもっていたわけではない。

2) ドイツ歴史学派の出発点とされるロツシャーの著作『歴史的方法による国家経済学講義要綱』が公刊されたのも、1843年であった。

1. 経済学と社会科学

経済現象を他の社会現象から分離して考察することはできないという「社会現象の統一性」の観点は、歴史学派が強調したものの一つであるが、ミルはこれについてもすでに論じていた。そして、この観点をめぐるミルの議論は、ミルと歴史学派との関係を考える上で、有益な示唆を与えるものとなっている。

ミルは、「特殊な社会学的研究」と「社会の一般的科学」とを区別する。前者は「社会事情のある一般の条件が前提された場合に、与えられた原因からどのような結果が生ずるか」(Mill CW8, p.911, 訳 140頁)を研究し、後者は「これらの一般的な事情を決定する原因は何であるか……, 一般に社会の状態を生ずる原因は何であるか、そしてまたこれを特徴づける現象は何であるか」(Mill CW8, p.911, 訳 140頁)を研究する。これらのうち、後者においては、社会現象の諸部分を分離することはできないが、前者においては、暫定的に分離して扱うことができるとされる。経済学は前者、すなわち「特殊な社会学的研究」に含まれるから、経済現象を他の種類の社会現象から分離して取扱うことができる。その根拠は、経済現象すなわち富に関する現象は主として富の欲望などの少数の原因に依存するので、これらの少数の原因を暫定的に分離して考察しても、経済現象への近似的に正確なアプローチが可能になる、という点にある。

ここで問題になるのは、コントとの関係である。「特殊な社会学的研究」としての経済学は、ミルのリカードウ派としての部分を表しており、「社会の一般的科学」は、コントの強い影響を受けて構想された部分であった。「社会の一般的科学」、あるいは社会学の構想は、のちの歴史学派の中でも、とくにコント主義者イングラムによって重視されることになる。ミル自身は、一貫して経済学を独立科学たりうるものと考えており、この点ではいささかも揺るがなかった。

しかし、コントやイングラムは、「特殊な社会学的研究」のような部分学の独立性を認めず、それらを一般的な社会学へ吸収しようとした。すなわち、ミルはコントの影響を受けながらも、「特殊な社会学的研究」を維持しようとしたのに対して、イングラムは、「社会の一般的科学」のみを認め、もう一方を廃棄しようとしたのである。

コントによる経済学批判は、なによりもまず、富の事実に関する研究を他の社会現象に関する研究から孤立化させようと試みることに向けられていた。イングラムもまた、これこそが古典派経済学の最大の問題点であると考えた。すなわち、経済学者たちは、自分たちが研究する特殊な現象、つまり社会の経済的現象を、社会の他のすべての側面から孤立化し、したがって社会の物質的側面を、社会の知的、道徳的、および政治的側面から孤立化し、後者の諸側面を除外して、前者のみを取り扱う独立した科学を構成しようとしている。人間知識の全体に対する経済学研究の関係という問題は、経済学研究をめぐって提起される諸問題のなかで、まさに最も根本的で重要な問題であり、経済学研究の未来は、他のどの点よりも、まさしくこの点にかかっている、というのである(Ingram 1878, p.48)。

ミルが経済現象の孤立化を正当化する根拠として提示したのは、社会現象は力学的アナロジーによって研究することができるという考えであった。ミルによれば、社会現象は複数の原因が合成して成立するのであるから、個々の原因から生ずる個々の結果が分かっているならば、諸原因が同時に作用するときの集合的結果である社会現象は、個々の結果を集計することによって求めることができる。したがって、複雑な社会現象を研究する場合には、まず社会現象の諸側面を分離し、個々の因果関係を解明しておかなければならない。経済現象の孤立化はその一環となるものであり、研究上不可欠な手続きだということである。

これに対してコント・イングラムが対置したのは、社会現象は生物学的アナロジーによって研究されなければならない、という考え方であった。有機的世界の研究は無機的世界の研究を前提とし引き継ぐものであるが、無機的世界の研究から有機的世界の研究へと進むとき、われわれは生きている全体という新しい観念に出会う。生きている全体は、特殊な働きを担当する限定された諸構造をもっており、それらすべてが相互に影響しあい、有機体の健康な生活という一つの結果を生み出すように協力しあっている。そこで、明らかにここでは、一つの器官の研究を、他の器官の研究や全体の研究から孤立化させることはできない。社会の研究は多くの点で生物学に類似しているのだから、生物学的な考察方法は、必要な変更を加えて、社会の研究にも適用することができる、というのである(Ingram 1878, pp.49-50)。

イングラムによれば、J.S.ミルは、一般的社会学の意義を認めながら、それと経済学との関係という問題について、明確な見解を示していない。イングラムは、ミルの著書の題目『経済学原理、および社会哲学に対するそれらの原理の若干の応用』を取り上げて、次のように述べる。

ときとして彼は、経済学を「社会科学の全体から切り取られた」一つの分科として語っているが、他方で、彼の体系的著作の題目が含意しているのは、経済学は「社会哲学」の一部なのかどうか、むしろ社会哲学の準備的・補助的研究ではないのか、という疑問である。かくして、学説の側面と同様に論理の側面についても、彼は二つの見解の間で立ち止まっていた。彼の疑惑と否認にもかかわらず、方法に関して、彼はなお旧学派の一員のみであり、将来有望な新学派あるいは「歴史」学派の中に加わってはいないのである。(Ingram 1915, p.150, 訳 218-219 頁)

コント・イングラムによれば、経済学は、社会科学にとって予備的な(preliminary)もの、すなわち真の社会科学のための道を準備し、そのための素材を提供することを目指すものでなければならない。したがって、真の社会科学が形成されたあかつきには、独立した学問としての地位を放棄して、その中に吸収されるべきものとみなされていた(Ingram 1878, p.53)。ところが、ミルにとっては、予備的あるいは暫定的(provisional)なものであるということの意味が、コントやイングラムとは違っていた。これについて、アシュレーは次のように指摘している。

「暫定的」という言葉は、コントの場合、実証的《社会学》が創り出されるまでということの意味していたが、ミルの場合には、現在の私有財産制度が続く限りということの意味した。現在の社会システムが根本的に変革されてしまうまでは、既存の諸条件に適用できる限り、リカードウ経済学の方法や結論の実質的な修正は必要ない、とミルは明らかに考えていた³⁾。(Ashley 1909, xxiii)

たしかにミルは、同時代の諸思想の影響を受けて自らの立場を修正していったが、その修正は、自らの出発点を放棄するというかたちにおいてではなく、「それを新しい舞台装置の中に位置づける」(Ashley 1909, ix)というかたちで行われたのである。ここで問題なのは、ミルがリカードウ派を越える視点を示しながら、リカードウ派の核心部分をけっして放棄しなかったという点である。経済学を社会学の中に吸収するという構想は、イングラム以降の歴史学派には継承されなかったけれども、コント的な社会学の観点を強調しない歴史学派にとっても、ミル評価の鍵となったのは、そのようなりカードウ

3) 傍点は、原文がイタリック体であることを表す。《 》は大文字で強調されている言葉を表す。

派としてのミルの態度であった。

2. 経済理論と帰納法

ミルは、「特殊な社会学的研究」である経済学に対応しい方法は、帰納 論証 検証の三段階からなる直接的演繹法であると主張した。これらの三段階のうち、狭い意味での演繹に当たるのは第二段階だけであり、第一段階と第三段階においては、帰納法が用いられるとされた。ミルの直接的演繹法は、歴史学派の大半の論者にとっては、リカードウ理論の方法論的定式化であると思われた。しかし、クリフ・レズリーは、それとは異なる解釈を示した。クリフ・レズリーは、第一段階と第三段階で帰納法が用いられるという点を捉えて、ミルがリカードウの方法から離れたものと解釈したのである。レズリーは、スミス以後のイギリス経済学者のなかに歴史的・帰納的方法を採用した者が少なからずいたことを認め、自らの研究もそれを継承するものであると位置づけた。レズリーによれば、スミスは自然法の理論と歴史的・帰納的方法とを組み合わせたのであるが、これらの二つの方法は、スミスの後継者たちによって別々に継承されることになった、というのである。

スミスの哲学の特異性は、これら二つの対立する方法を組み合わせたところにある。そこでわれわれは、スミスの系統を引くと称する二つの経済学体系をもつことになる。一方の体系は、リカードウ氏を創始者とするもので、もっぱら仮説的な法則または自然本性の原理から推理し、その前提の確定のために帰納を用いないだけでなく、その演繹の結論を検証するためにも帰納を用いることがない。他方の体系——その代表者は、スミス後の世代ではマルサス、われわれ自身の世代ではミル氏と考えられる——は、アダム・スミス自身と同様に、アプリアリの方法と帰納法(the à priori and the inductive methods)とを組

み合わせ、しばしば純粋な仮説から推理することがあるのは確かであるが、しかしまた経験からも推理し、そして経験のテストが演繹において要求するかもしれない訂正を躊躇しないのである。(Leslie 1870a, p.151)

古典派を激しく批判したレズリーも、経済学における演繹法そのものを否定していたわけではなかった。彼が批判したのは経済理論の抽象性であり、それに対置したのが、理論の前提を現実的なものにするということ、理論の結論を事実にも照らしてテストすることであった。そのため、理論の前提と結論において事実を参照すべきであると主張したミルを、自分の立場に近いものと解釈したのである。

しかし、ミルは直接的演繹法の第一段階を帰納としていたが、そのときの帰納の意味は、レズリーが考えるものとは違っていた。つまり、ミルの場合には、与えられた事実をその要素に分解し、その要素間の因果関係を明らかにすることが、第一段階の帰納の意味であった。これに対してレズリーは、与えられたままの複雑な事実を対象として現象間の因果関係を説明することを、第一段階の帰納の手続きと考えていた。両者は、同じ帰納という言葉を用いながら、別の手続きを思い描いていたのである。

このようなズレがあったために、二つの問題が生ずることになった。第一に、与えられた事実から一般化される経験的法則には多くの例外が伴うため、一般化の手続きはきわめて困難なものとなる。そこで、理論の前提を現実的なものにすることを主張する歴史学派は、性急な一般化を批判し、忍耐強い事実調査を擁護することになった。そのため、経済学はいまだ演繹を行う段階にはなく、まず行うべきなのは、それに先立つ帰納的研究である、という主張が現れることになる。このようにして、現時点において経済学に対応しい方法は、演繹法なのか帰納法なのか、という対立が現れることになったのである。第二に、経済理論家は、与えられた事

実をその要素に分解し、その中の重要な要素のみを取り上げて理論を構築しようとする。現実の一部を取り上げるということは、同時に、他の要素を捨象するということでもある。このような抽象化・理想化が避けられないものである以上、経済理論の前提が非現実的であるという批判は、完全には回避できないことになる。古典派の理論の前提が非現実的であるという批判は、リカードウだけではなく、ミルに対しても向けられた。経済理論に一定の理解を示していたトインビーも、次のようにミルを批判するのである。

ミルは、1843年出版の『論理学』と、これよりもかなり前に書かれ、『論理学』の中でも多数引用されているが、1844年まで纏まっては出版されなかった論文「経済学の方法」において、リカードウの方法の性質をこれ以上望むところがないほど明白に説明している。しかし、ミルおよびシーニアの両者がすべきであったことは、たんにリカードウの仮定がいかなるものであったかを指摘することではなく、彼らが住んでいる産業世界の実際の観察から、これらの仮定がどの程度事実であるかを確かめ、このようにして獲得された知識から、実際世界における価格、利潤、賃金、地代の法則を述べることであった。……ミルは、しばしば痛ましい努力により、彼の前提に含まれていない諸事実の存在を認めたと、それらの重要性は見落としたのであった。(Toynbee 1884, pp.145-146, 訳 196-197頁)

先に述べたように、レズリーは、ミルが理論の結論を事実に照らして検証しなければならないとしたことを、高く評価した。しかし、その後の歴史学派は、事実の研究に与えられた「理論の検証」という役割にも、不満を感じるようになってゆく。ミルによれば、特殊の経験の方法は、「真理を発見する手段としてではなく、それを検証する手段として、大きな価値をもつ」

(Mill CW4, p.331, 訳 195頁)のものであった。歴史学派にとっては、このような位置づけは、事実研究を理論研究の付属物にするものにほかならなかった。この問題は、とくに経済史の課題をめぐって、先鋭なものになってゆく。イギリスにおける経済史学の確立に大きな貢献をしたのは、とくにカニンガムとアシュレーであったが、彼らは、理論の検証のために歴史的事実に向かうという態度を批判したのである。カニンガムによれば、「経済史に対してとりわけ好意的でない態度をとってきたのは、『経済学』を経験科学ではなく『社会哲学』の一部門と考える著作家たちであった(Cunningham 1916, p.4, 訳 5頁)。それらの著作家の中には、当然のことながらミルも含まれていたが、問題はミル個人に対する批判という範囲を越えていた。カニンガムやアシュレーが問題にしたのは、とくに、ミルの方法論を継承したマーシャルやJ.N.ケインズの見解であった。アシュレーは、J.N.ケインズによる理論の検証に関する議論を取り上げて、次のように述べる。

この同じ著者が経済理論の歴史による例証へと進むとき、彼が取り上げる種類の例証は、中世における「日照りの夏」が「道具の消耗を生じさせ、結果的に需要の増大と価格上昇を引き起こすために、土地管理人の報告書はしばしば『早魃による鉄の高価格』に言及している」といった言明なのである。彼によれば、「需要の価格への効果について、これ以上の例証を得ることはできないであろう」というのである。(Ashley 1893, p.12)

アシュレーによれば、「歴史家にとっての経済理論の実際の効用に関する限り、使用される言語の大半が、不必要に仰々しいと感じないわけにはいかない(Cunningham 1893, p.12)。経済史家が関心をもっているのは、需要や価格の変化というよりも、社会進歩の過程であり、後者の研究にとって、経済理論は目に見える貢献をし

ていないというのである。この批判は、直接ミルに向けられたものではなく、経済史に応用されたミルの方法に対する批判であった。レズリーはリカードとミルを切り離そうとしたが、歴史学派の大勢は、ミルを正統派の一員に位置づける方向で進んでいったのである。

しかし、ミルが歴史的事実の参照を求めているのは、経済理論の前提の形成と結論の検証という場面だけではなかった。それとは別に、まさに社会進歩の過程を探究するために歴史的事実を取り上げるという方法をも提唱していたのである。では、その方法は歴史学派によってどのように評価されたのであろうか。この問題を考察することが、次節の課題となる。

3. 歴史的方法

ミルと歴史学派との関係を考えるとき、最大の焦点になるのは「歴史的方法(historical method)」であろう。歴史学派は、古典派の演繹的方法に対して、歴史的方法を対置して登場してきたのであるが、それに先だって、古典派を代表する人物の一人であったミルが、すでに歴史的方法を提唱していたからである。先に述べたように、ミルは社会研究の領域を「特殊な社会学的研究」と「社会の一般的科学」とに区分したが、われわれがこれまでに考察したのは、前者の「特殊な社会学的研究」であった。その一部をなす経済学の原理に関する限り、歴史学派の大半は、ミルをリカード派の枠内にあった経済学者であると解釈した。では、「社会の一般的科学」の領域についてはどうだったのであろうか。ミルの歴史的方法は、まさに「社会の一般的科学」の中軸を担う方法として考えられていたのである。

ミルの場合、「社会の一般的科学」は社会静学と社会動学とに区別される。この区別はコントに倣うものであるが、両者はそれぞれ次のような特徴をもつものとされる。

社会の経験的法則には二種類がある。一つは共存の斉一性で、他は継起の斉一性である。科学がこの斉一性の中の前者を研究するか、または後者を研究するかに応じて、コント氏は《社会静学(Social Statics)》という名称と、《社会動学(Social Dynamics)》という名称とを与えた。これは力学における均衡状態と運動状態との区別に対応し、また生物学における有機体の法則と生命の法則との区別に対応する。社会動学は進歩的狀態にあると考えられた社会に対する理論で、社会静学は社会有機体の種々異なる部分の間に存在するものとしてすでに述べられた共感性(consensus)の理論である。(Mill CW8, pp.917-918, 訳 151頁)

これらの二つの分野のうち、社会静学のもたらした主要な成果の一つは、安定した政治的統合体の必要条件を確かめたことであるという。ミルによれば、このような研究に取り組んだのが、イギリスにおいてはコールリッジであり、その先駆者となった前世紀後半のドイツ人たちであった。それらの人々は、「人間社会の存続と発展とに関する帰納的諸法則(inductive laws)を、包括的にまた深く探究した最初の人々であった」(Mill 1840, pp.138-139, 訳 168頁)。彼らが明らかにした政治的統合体の条件とは、以下の三つであるとされる。すなわち、第一に、すべての人々に対する教育組織、とくに自制的訓練が存在していること、第二に、人々の間に、何らかの形で恭順または忠誠の感情が存在すること、第三に、強力な結合の原理、すなわち自然的ないし歴史的境界の内部に含まれている人々の間に共通利益の感情が存在すること、これである。

しかし、社会静学において明らかにされる共存の斉一性は、社会の一状態と他の状態との間の継起関係を支配する法則から導かれた誘導的法則であるから、社会科学の根本問題は、社会のある状態と、他の状態との間の継起関係を支

配する法則を明らかにすることでなければならない(Mill CW8, p.912, 訳 142-143 頁)。これが、社会動学の課題となる。ミルは、社会動学についても先駆者がいたことを認めている。「コールリッジ論」では、ドイツ・コールリッジ学派(Germano-Coleridgian school)が、社会における共存の斉一性を探究するだけでなく、その先にある研究、すなわち歴史における因果関係を解き明かそうとする研究にも取り組んだとされている(Mill 1840, pp.138-139, 訳 169 頁)。『論理学体系』においては、「大陸の最も進んだ思想家たち」あるいは「新しい歴史学派(new historical school)」が、歴史研究に大きな貢献をしたと述べられている(Mill CW8, pp.914-915, 訳 145-147 頁)。両著作でそれぞれ取り上げられている学派が、同一のものと認識されているのかどうかは明らかではない。しかし、ミルの歴史的方法が、先行するさまざまな歴史研究の中でも、とくにコントの影響を受けて形成されたものであることに疑いはない。ミルは、「新しい歴史学派」の大半が、歴史からの一般化によって経験的法則を導いていることを指摘した上で、次のように述べる。

経験的法則を発見するのが科学の究極目的ではありえない。この法則がその依存する心理学および性格学的法則と結びつくまでは、そしてアプリアリな演繹と歴史的証拠との合致によって、この法則が経験的法則から科学的法則に転換されるまでは、この法則は、近接している例においてならばともかく、それを超えて未来の事象を予測するために頼ることはできない。新しい歴史学派の中において、歴史から導いたあらゆる一般化を人間本性の諸法則と結びつける必要があることを知っていたのは、コント氏だけであった。(Mill CW8, p.915, 訳 146-147 頁)

社会現象に関する経験的法則の発見は、大きな意義をもつとはいえ、科学はそこに留まるこ

とはできない。なぜなら、ミルにとって科学の正当な方法とは、複雑な現象を究極的な要素に分析し、その要素から複雑な現象を再構成するものでなければならないからである⁴⁾。「特殊な社会学的研究」である経済学においては、演繹すべき結論を富の現象に限定することによって問題を単純化し、少数の究極的要素からの演繹を可能にした。これは、先に述べたとおりである。これに対して、社会状態の発展を問題にする「社会の一般的科学」においては、分析 総合の方法は大きな困難に直面する。なぜならば、そこでは考慮しなければならない原因があまりにも多く、また人間と環境との相互作用をも考えると、直接の演繹によって結論を導くことは人間の能力を超えるものであると考えられるからである。そこでミルが頼ろうとしたのが、コントによって示唆された歴史的方法、あるいは逆の演繹法であった。この方法によって、社会状態の発展という複雑な問題を取り扱う場合にも、究極的要素からの演繹が可能になるように、問題を縮約することができるからである。つまり、複雑な社会現象を支配する原理があるとみなし、その原理を究極的要素から演繹することができるならば、その原理を媒介として、究極的要素から複雑な社会現象が演繹されると考えることができる。したがって、演繹すべき結論は、複雑な社会現象全体ではなく、その中間原理へと縮約されることになる。ミルによれば、歴史的証拠からの一般化によって、人類の思弁的能力の進歩が他の社会的要素の変化を支配する、という経験的法則が獲得される。したがって、人類の思弁的能力の進歩の仕方を人間本性という究極の要素から演繹できるならば、この経験的法則を中間原理として、究極的要素と複雑な現象とを結びつけることができる、というのである。このようにしてミルは、「なるほど《逆の演繹法》ではあるけれども、歴史的方法

4) この点については、佐々木(2001, 第5章)を参照されたい。

を《演繹法》と名づけることができるようになったのである〔Ashley 1909, xvi〕。

イギリス歴史学派の中で、コントミル的な歴史的方法をはっきりと支持したのは、イングラムであった。イングラムは、社会が徐々に経過する段階を体系的に比較・観察したうえで、その結論を人間本性の諸法則から演繹する方法を歴史的方法と呼んだ(Ingram 1915, p.193, 訳 284-285 頁)。彼によれば、旧経済学者(the older economists)の研究において、演繹が過度に幅をきかせていたことは疑いないところであるが、ア・プリオリな仮定からではなく証明された一般化から出発するのであれば、演繹は正当な過程なのだということを忘れてはならない、というのである(Ingram 1915, p.207, 訳 306 頁)。しかし、コント主義者イングラムは、コントとミルを同等に評価したわけではなかった。イングラムによれば、ミルは完全にコントの影響下に入ったのではなく、若い頃に受けた教育の影響を終生脱することができなかったという。イングラムにとっては、ミルが歴史的方法すなわち逆の演繹法を認めながら、直接的演繹法を放棄しないことが不満であった。その点で、ミルの立場は不徹底であると思われたのである。

彼の青年時代の狭隘な教条と後年の広範な思想との首尾一貫しない混合のために、彼の哲学全体が動揺し一定しない性格のものになった。彼はすべての点において著しく「未完成」であった。彼は新見解の傾向を代表し、さまざまな方向における新しい展望を開いたけれども、ほとんど何も創設しなかった。彼自身の立場に関する限りでは、たんに不完全であっただけでなく、首尾一貫しないままであった。(Ingram 1915, pp.146-147, 訳 213 頁)

ミルに対するイングラムの評価が上記のようなものになったのは、イングラムが、古典派の理論的方法を歴史的方法によって置き換え、そ

れによって経済学を社会学に吸収しようと考えたからであった。そのため、ミルのように、経済理論の方法として直接的演繹法を認めた上で、それとは別に歴史的方法(逆の演繹法)を提唱するということは、受け入れることのできない方針だったのである。しかし、その後のイギリス歴史学派の展開は、二つの意味で、イングラムの企図とは違う方向へと進んでいった。すなわち、第一に、経済理論を否定するのではなく、理論的方法と歴史的方法の両方を認める方向へと進んでいった。その限りでは、歴史学派もミルと同様に、二つの方法の並存を容認するようになったといえることができる。ただし、ミルの場合には、理論的方法は実質的な成果を産み出したが、歴史的方法は方法論の提示にとどまった⁵⁾。これに対して、歴史学派の場合には、実質的な成果を産み出したのが、歴史的方法だったのである。第二に、歴史的方法そのものも、コントミル的な歴史的方法とは違うものになった。ミルは、歴史の経験的法則を探究し、それを究極的な要素から演繹することをもって、歴史学が科学になると考えていた。しかし歴史学派は、複雑な現象をその要素から再構成すると

5) ミルは『論理学体系』において、歴史的方法によって社会現象を研究したのはコントだけであると述べている。『経済学原理』で静学と動学の区別が導入されているけれども、その動学は、与えられた事実からの一般化を試みる歴史的方法ではなく、理想化された状況を想定して推論する理論的方法に依拠するものであった。この点について、アシュレーは次のように述べている。「静学・動学の区別は、コントが意図したものと、かなり違ったものになった。ミルの著書の第4篇、『社会の進歩』に関わる部分のほとんどすべてが、高度に理論的・抽象的な論述からなっており、現存するタイプの競争社会内部で、人口、資本、および生産技術がさまざまに結合して増加することが、価格、地代、利潤、賃金に及ぼす影響について論じられている。これらの論述の実質的部分の大半は、リカードウおよびその学派に由来するものであり、ミルが独自の議論を行うところさえ、その議論全体がリカードウの圏内を動いているのである」〔Ashley 1909, xx〕。

いう方法には与しなかったし、歴史法則の定式化についても慎重な姿勢を示すようになってゆく。したがって、同じく歴史的方法という用語を使用していたとはいえ、この方法に関するミルから歴史学派への影響は、大きなものではなかったといわなければならない。ミルのいう「歴史学派」は経済学上の歴史学派ではなく、「歴史的方法」も経済学の方法ではなかったのである。

4. 行為の多元性

古典派の経済理論に登場する人間は、利己心や富の動機に基づいて活動するものとされ、現実の人間がもっている多様な動機の多くは捨象されていた。歴史学派は、このような古典派の人間像に対しても、批判の矛先を向けた。すでに1830年代に、歴史学派の先駆者リチャード・ジョーンズが、慣習や法といった制度が人間の行為に影響を与えるため、制度が異なるのに応じて経済行為も多様なものになると論じていた。さらに1870年代になると、クリフ・レズリーが、行為の多元性という歴史学派の観点を全面的に展開した。しかしミルは、ここでもまた、歴史学派の見地に同調するかのような見解を示していた。すなわち、ベンサムの間人観を批判して、現実の人間は利己心や富の動機のみによって動くわけではないという見解を示していたのである。

ベンサムによれば、人間とは、快樂と苦痛とを感じることでできる存在であり、また、そのいかなる振る舞いにおいても、一つには利己心のさまざまな変形物によって、および普通は利己的と認められている情念によって、支配されているし、また一つには他の存在に対する共感によって、また時にはそれに対する反感によって、支配されている存在であると考えられている。そして、人間性についてのベンサムの概念把握は、これ以上には出な

いのである。(Mill 1838, p.94, 訳 86-87 頁)

ベンサムは、自分自身が人間性の最も自然で最も強い感情の多くのものを欠いていたために、また自分とは異なる精神を理解するための想像力を欠いていたために、人間性および人間生活についての分析に失敗したというのである。そのような想像力は、詩人だけではなく、歴史家にとっても必須のものであり、「この力によってわれわれは他の時代を理解する」(Mill 1838, p.92, 訳 81 頁)のだという。ミルによれば、個人の性格についてきわめて貧弱な型しか思い描けなかったベンサムは、よりいっそう複雑な国民性という問題を取り扱うことができなかった。ところが、「国民性の哲学に基づいていない法律および制度の哲学などは、不条理なものでしかない」(Mill 1838, p.99, 訳 96 頁)。ベンサムが取り扱うことができなかった国民性の問題に、ミルは国民的性格学(Political Ethology)を構想することによって対処しようとした。ミル自身は性格学の研究を実際に行ったわけではなかったが、「しかし、その企画を生み出した思想の痕跡は、『競争と慣習』に関する章の中に残っている」(Ashley 1909, xix)。つまり、経済行為は、競争というかたちを取る場合もあれば、さまざまな慣習によって支配される場合もあり、そのあり方は国民ごとに、あるいは地域や事業部門ごとに異なっている、ということが『経済学原理』の中で明示されているのである。

このようにミルは、人間の多様な動機を認め、人間の行為が制度的な制約を受けることも認めた。しかし、このことは、ミルのアプローチが歴史学派のそれと同じであったことを意味するわけではない。ミルが行為の多元性を認めたのは、政治学や歴史学において人間が問題にされる場合であり、また現実の人間をそのまま考察の対象にする場合であった。経済学の原理においては、ミルは一貫して、富の動機を始めとするごく少数の動機と、慣習の影響を捨象した競争の場を想定し続けた。ミルの場合、行為の

多元性が問題になるのは、原理そのものにおいてではなく、原理を応用するときだったのである。これに対して、歴史学派の主たる研究分野となったのは、いうまでもなく歴史の分野であったから、彼らが必要としたのは、より現実的な人間像であった。つまり、歴史学派にとって行為の多元性は、応用の場面で初めて問題になるようなものではなく、あくまでも第一次的なものだったのである。

5. 学説の相対性

競争と慣習をめぐる問題は、学説の相対性という問題とも関係している。学説の相対性、すなわち特定の学説は歴史的・地理的に限定された範囲内でのみ有効であるという見地は、歴史学派が強く主張したものであったが、ミルの『経済学原理』には、このような見地を示唆する叙述も含まれていた。そして、ミルが学説の相対性という見地を示していたことは、歴史学派の論者によっても認められていた。この点について、イングラムは次のように述べている。

ミル自身、経済学が科学としての性格を主張しうるのは、ただ競争を経済現象の唯一の規制者とすることによってのみであると述べながら、競争は比較的現代に近い時代においてのみ、かなりの程度、契約を支配する原理になるということ、すなわち初期の時代においては、取引や取り決めは慣習によって規制され、今日に至るまで大陸の数力国では、人間の取引の大部分が競争ではなく慣習によって調停されているということを認めている。(Ingram 1878, p.67)

このような認識をもっていたのは、イングラムだけではない。例えば、カニンガムも、「ミルの一般的態度は、歴史学派への共感をそれほど示すものではなかったが、彼は、経済学的な概念把握は狭い限界内でのみ適用可能であ

るという事実には、鋭敏に気づいていた」(Cunningham 1894, p.329)と述べているのである。

学説の相対性という見地は、法則や理論の相対性を強調するだけではなく、実践的な主張を伴うことも多い。すなわち、時代や地域が違えば、望ましい政策や制度も違うものになるという主張である。ミルは、実践的な意味における学説の相対性についても、これを支持する発言をしていた。例えば、『経済学原理』の中で、ミルは次のように述べている。

今日の社会生活の特徴となっているものは、互いに人を踏みつけ、押し倒し、押し退け、追い迫ることであるが、これこそ最も望ましい人類の運命であって、決して産業的進歩の諸段階中の一つが具えている忌むべき特質ではない、と考える人々が懐いている、あの人生の理想には、正直にいて私は魅力を感じないものである。それは文明の進歩の途上における必要な一段階ではあるであろう。そしてヨーロッパの国民にして、幸運にも今日まではそれを免れてきたものも、行く行くはそれを体験しなければならないであろう。(Mill CW3, p.754, 訳 105頁)

つまりミルは、「今日の社会生活の特徴」は、文明の進歩の途上における一段階としては必要なものであるという歴史的に相対的な意義を認めながら、それが永遠不変に望ましいものであるとは考えられない、と述べているのである。ミルが学説の相対性という観点を受け入れるにあたって、大きな影響を与えたのは、とくにサンシモン派とハリエットであった(Ashley 1909, xxi)。このことは、ミル自身が『自伝』で記していることでもある。例えば、サンシモン派からの影響について、ミルは次のように述べている。

《自由主義 Liberalism》という通常の学説

に対する彼らの批評には、重要な真理が多分に含まれているように思われた。私有財産や遺産相続を動かし難い事実と考え、生産と交換の自由を社会改良の最後の切り札と考える古い経済学(the old political economy)は、きわめて局限された一時的な価値しかもたないことに初めて私の眼が開いたのは、半ばは彼らの著作によることであった。(Mill 1873, pp.174-175, 訳 148-149 頁)

このようにミルは、一方で、「私有財産制と競争」を仮定する経済理論の歴史的相対性を認め、他方で、「自由主義」という実践的立場の限界を認めた。学説の相対性は、歴史学派が最も強く主張した観点の一つであったが、明らかにミルは、この観点を支持する見解を示していたのである。

しかし、法則や理論の相対性という意味での学説の相対性に関しては、ミルと歴史学派との間には、その位置づけという点で、大きな相違があったといわなければならない。というのは、行為の多元性を取り上げた前節で示唆したように、ミルが経済理論の歴史的相対性を認めたのは、原理そのものではなく原理の応用についてだったからである。ミルにとって、古典派の経済理論と全く異なる形態の経済学原理というのは、考えられないものであった。その意味で、原理そのものは普遍的な意義を有するものとして位置づけられていたのである⁶⁾。他方の歴史学派は、競争が支配的になるまでのイングランド経済史を精力的に研究した。彼らにとって、理論の相対性という見地は、そのような時代の研究には古典派の経済学原理はあまり役に立たない、という消極的な教訓を与えるものであった。つまり、経済学の原理というものは、ミルにとっては、一定の修正を加えればさまざまな状況に応用可能なものであったが、歴史学派に

とっては、自分たちの研究に役立たないものだったのである。

これに対して、実践的な意味での学説の相対性についていえば、ミルは歴史学派に多かれ少なかれ影響を与えたと考えることができる。例えばトインビーによれば、「自由競争の制度の下で、何が不可避であり何がそうでないかを示そうとしたミルの試みは、大きな前進であった。そこにわれわれは、社会主義という対抗的体系が、すでに経済学者に及ぼしはじめた影響を見るのである(Toynbee 1884, p.65, 訳 89 頁)。つまり、協同組合の設立や相続制限等の立法措置を通して、資本 賃労働関係を変革する方途を示していたミルは、既存の自由主義的政策体系を相対化し、改良主義的な政策思想を提案しようとする運動を支持するものとして受け取られたのである。歴史学派の経済史研究には影響を与えなかったとしても、彼らの多くが支持した改良主義運動には、ミルも与って力があつたということができる。カニンガムが述べるように、「ミルは、過去については全く、当時の経験の詳細については比較的わずかしが、労力を投じなかった。彼の目は、来るべき未来に向けられていたのである」(Cunningham 1894, p.319)。

おわりに

クリフ・レズリーは、ミルとリカードとの違いを強調したが、歴史学派の多くは、むしろ両者の共通性に注目した。ミルはたしかに、実証主義、社会主義、ロマン主義の考え方を取り込み、また現実感覚を働かせて、旧来のベンサム派・リカード派とは異なる観点を示した。しかし、経済学の原理に関してはリカード派の立場を堅持しており、新しく示された観点は観点の提示に留まっていて、歴史研究の先駆的な業績があつたわけではなかつた。そのような意味で、歴史学派にとってのミルは、旧学派の一員であつた。社会学を志したイングラムは、

6) ミルの経済学原理の性格については、佐々木(2001, 第6・8・9章)を参照されたい。

経済学の自立性を強調するミルを認めるわけにはいかなかったし、経済史の研究に進んだカニンガムやアシュレーにとっても、ミルは先駆者とはいえなかった。ミルの経済学研究の中心は、経済学原理であり、わずかにその応用が試みられているだけだったのである。

しかし、実践的な意味では、ミルの学説は、社会改良主義への突破口の一つになった。何人かの歴史学派がミルを評価したのは、むしろこの点であった。社会改良主義は、社会研究における方法の相違を越えて、支持者を拡大していったのである。ミルのこの側面に関する評価は、次のようなイングラムの言葉のなかに、はっきりと表明されていると見てよいであろう。

彼自身が「自分の論考の主要な功績」と考えたのは、生産論と分配論の間にはっきりとした区別を設けたことであった。……この区別の中には重大な真理がある。それを承認することによって、現存の富の分配をいかにして改善しうるか、という問題に注意を集中するようになるからである。この問題に関する研究は、年を経るにしたがって、ミルをますます社会主義の方向へと導いた。そして、晩年に至るまで、彼の著書の他の箇所は変更されたのに対して、啓蒙された利己心(enlightened selfishness)の原理からリカードウ学説を演繹するという点に変更されなかったけれども、彼は、共感に基づいて共働が行われる事物の秩序を希求していたのである。(Ingram 1915, p.147, 訳 214 頁)

参考文献

- Ashley, W.J. 1893, On the Study of Economic History, in W.J.Ashley, *Surveys, Historic and Economic*(1900), New York: Augustus M. Kelley, 1966.
- Ashley, W.J. 1909, Introduction, in J.S. Mill, *Principles of Political Economy*, London: Longmans, Green, and Co., 1909.
- Cunningham, W. 1894, Why had Roscher so Little Influence in England?, in *The Methodology of Economics: Nineteenth-Century British Contribution*, Vol.7: Alfred Marshall and William Cunningham, London: Routledge/Thoemmes Press, 1997.
- Cunningham, W. 1916, *The Progress of Capitalism in England*, Cambridge University Press, 塚谷晃弘訳『イギリス資本主義発達史』邦光書房, 1963.
- Edgeworth, F.Y. 1896, Mill, John Stuart, in R.H.I. Palgrave ed., *Dictionary of Political Economy*, Vol.2., London: Macmillan.
- Ingram, J.K. 1878, The Present Position and Prospects of Political Economy, in R.L.Smyth ed., *Essays in Economic Method: Selected Papers read to Section F of the British Association for the Advancement of Science, 1860-1913*, London: Gerald Duckworth.
- Ingram, J.K. 1915, *A History of Political Economy*, new and enlarged edition, Edinburgh: A. & C. Black, 米山勝美訳『経済学史』早稲田大学出版部, 1925.
- Maloney, J. 1987, English historical school, in J. Eatwell, M.Milgate and P.Newman eds., *The New Palgrave A Dictionary of Economics*, Vol. 2, London: Macmillan.
- Mill, J.S. CW1, *Autobiography and Literary Essays*, University of Toronto Press, 1981, 朱牟田夏雄訳『ミル自伝』岩波文庫, 1960年.
- Mill, J.S. CW2・3, *Principles of Political Economy, with Some of Their Applications to Social Philosophy*(1st ed., 1848; 7th ed., 1871), University of Toronto Press, 1965, 末永茂喜訳『経済学原理』全5分冊, 岩波文庫, 1959-1962年.
- Mill, J.S. CW7・8, *A System of Logic: Ratiocinative and Inductive*(1st ed., 1843; 8th ed., 1872), University of Toronto Press, 1973, 大関将一・小林篤郎訳『論理学体系：論証と帰納』全6分冊, 春秋社, 1949-1959年.

- Mill, J.S. CW10, *Essays on Ethics, Religion and Society*, University of Toronto Press, 1969.
- Mill, J.S. 1838, Bentham, in Mill CW10, 松本啓訳『ベンサムとコウルリッジ』みすず書房, 1990年.
- Mill, J.S. 1840, Coleridge, in Mill CW10, 松本啓訳『ベンサムとコウルリッジ』みすず書房, 1990年.
- Mill, J.S. 1865, Auguste Comte and Positivism, in Mill CW10, 村井久二訳『コントと実証主義』木鐸社, 1978年.
- Roscher, W. 1843, *Grundriss zu Vorlesungen über die Staatswirtschaft nach geschichtlicher Methode*, Göttingen: Druck und Verlag der Dieterichschen Buchhandlung, 山田雄三訳『歴史的方法による国家経済学講義要綱』岩波文庫, 1938年.
- 佐々木憲介 2001, 『経済学方法論の形成——理論と現実との相剋 1776-1875』北海道大学図書刊行会.
- Toynbee, A. 1884, *Lectures on the Industrial Revolution of the Eighteenth Century in England*, London: Longmans, Green, and Co., New and Cheaper ed., 1908, rpt., 1920, 川喜田孝哉・斉藤泰次郎・杉浦滋・原田檀訳『英国産業革命史』高山書院, 1943年.